

専門図書館論

——科学研究における情報活動の意義とその組織化——

原 田 勝

目 次

はしがき

I 専門図書館と図書館

- 1 専門図書館の諸特性
- 2 図書館の諸類型
- 3 専門図書館の機能

II 専門図書館とその環境

- 1 科学におけるフォーマルなコミュニケーションシステムの成立
- 2 専門図書館とその環境
- 3 サービス機能の検討
- 4 コミュニケーション的図書館学の検討

III 専門図書館の役割を求めて

- 1 研究開発における情報活動の意義
- 2 専門図書館の役割

むすび

註

は し が き

ある現象や制度について論ずる場合、その定義から議論を始め、定義の解説、付加的説明と進めていくのが、理解を容易にするには、最も適切かもしれない。しかし、専門図書館の公けに認められた定義は現在まだない。多くの論稿は定義の存在を当然の前提として論を進めているが、これは専門図書館について共通の理解が得られているためであるよりは、むしろ、明確な定義を下すという困難な作業を回避したためではないだろうか。

ところで、フォセットは、「専門図書館を定義するという作業に直面した図書館員はねずみに出会った犬のようである。それをどう定義してよいかわからないが、見ればそれだとわかる。」⁽¹⁾と述べて、専門図書館を定義することの難しさを認めつつも、多くの人々の頭の中には、あいまいではあるが、共通の概念が作りあげられていると考えている。彼によれば問題はそれをどう言い

表わすかである。しかし、我々は専門図書館を見れば確実に専門図書館だとわかるであろうか。我々は、実は、偶々多くの共通要素を含むことにはなるが、まったく異質の識別基準に基づいて構成されている集合を専門図書館として理解して、この基準によって判断を下しながら、専門図書館か否かは「見ればわかる」と考えているのではないだろうか。

もちろん、言葉で表わされた定義の有無それ自身はそれ程重要な問題ではない場合もあろう。その役割が明確に認識され、それに沿って活発な活動が続けられている機関においては、その役割の明示以上の細かい制限的な規定を定めることは、その規定ゆえに、また言語の定着性の故に、かえって進取の芽を摘みとり、機動性を損なう結果になるかもしれない。しかし、専門図書館については、その役割あるいは機能として定められていることからの多くは業務の羅列にすぎず、本来の役割およびそれによって定まる目標ははっきりしていない。これは、専門図書館の存在理由についてこれまで十分な考察が加えられたことがなかったことによるものである。このことは専門図書館の上位概念とされている図書館についても言える。

以上より、専門図書館については、定義の必要性もさることながら、その前に考察すべきいくつかの重要な問題があると考えられる。本稿はこれらの問題に解答を与えるものではない。ただ専門図書館は現在どのようなものとして理解されているかを見て、その後それがいかなる活動に依拠し、いかなる役割を担うべきかについて考察を加えて、これらの問題への手がかりを与えようと試みただけにすぎない。

I 専門図書館と図書館

1 専門図書館の諸特性

専門図書館を他の図書館から区別している特性とし

て、ストレイブルらは次の5点を挙げている。⁽²⁾

- (1) 所在する場所が異なる。
- (2) 主題範囲が限られている。
- (3) 利用する、あるいはサービスをする人々の種類あるいはグループが異なる。
- (4) 「小規模である」という圧倒的特性を持つ。
- (5) 情報機能に力点を置いている。

このような特性は多くの論者によって指摘されているところであり、現象的特徴としてはこれ自体に異論はないだろう。しかし、この特性はそのまま定義にはならない。なぜなら、フォセットも指摘しているように、「主題範囲の制限、およびドキュメンテーションサービスへの力の集中は疑いもなく現存し、かつ定義のもととなる特性を提供してはいるが、私の考えでは、これらは原因というよりはむしろ結果であり、公共図書館、大学図書館においても現われている」⁽³⁾からである。そして定義を下す場合は、その制度の役割を明確にすることが最も必要とされるが、ストレイブルらはこれらの特性がいかなる役割から導かれたものであるかについては何も語っていない。

ところで、米国の専門図書館員たちは、専門図書館の定義に代わるものとして、1909年7月2日ブレトンウッズ (Bretton Woods, New Hampshire) における米国専門図書館協会 (Special Libraries Association) が正式に発足した際の会合で採択された、「知識を活用する」 (Putting Knowledge to Work) というスローガンを現在もその活動の導標として掲げており、これが専門図書館の「専門」たる所以を最も明確に定める特性であると述べている。⁽⁴⁾しかし、このスローガンも知識を活用する対象・理由・方法などが充分明らかにされない限り有効にはなりえず、専門図書館を他の図書館と変わらぬものにしてしまう。そして専門図書館を他から識別する基準を見出すことが困難なのが現状である。

2 図書館の諸類型

図書館は「記録された知的文化財を収集・組織・保存して利用に供する社会機関である」⁽⁵⁾と「定義」されている。図書館が定形的業務の受託機関でないことは現在広く認められているところであるのに対して、この定義は図書館でなされている (あるいは、なされるべき) 業務を示したものであり、その業務はまた図書館学あるいはライブラリアンシップの哲学といった強力な基礎に依拠したのではなく、「利用対象の要求の推移につれて不断に変化して固定することがない」⁽⁶⁾ (これをダイナミックな活動と考えている人が多いようであるが、これ

は決してそのようなものではない)、浮草のように定まらぬものであり、そのことがかえって図書館あるいは図書館員の保守性および業務の画一性を押し進める一因となった、という批判はしばらくおこす。著者は、図書館をこのような任務を果たす社会機関として把えた後、「設置主体別」、「経営形態別」、「利用対象別」、「機能別」といった区分の方法を用いて図書館の類型化を行っている。この中で専門図書館は、利用対象と機能を基準として、特定の対象だけに開放される主として単機能図書館 (特定分野の利用者を対象にしたもの) である特殊図書館の一つとして位置づけられている。⁽⁷⁾しかし、特殊図書館の細分を見ると、結局この分類は、各種の図書館の本質的な性格の相違に基づくものではなく、所属機関の類型による便宜的な分類にすぎないように思われる。

3 専門図書館の機能

図書館学研究者のこのような図書館の画一的な把握の仕方に対して、専門図書館人は専門図書館をどのように把えているだろうか。河野らは明確な定義を下さず、代わりにその果たすべき機能によって専門図書館を限定しようとしている。すなわち、専門図書館の機能は「各々の所属する企業体や機関に必要な情報資料を、組織的にかつ専門的に収集して、これを活用しやすいように整理しておき、要求があればいつでも探索が可能な状態にしておき、必要な情報資料を索出して、活用し得る段階にすることと、……専門図書館員が、必要と認められる情報があれば、すぐに収集して、これを加工・変換する作業、例えば、抄録誌、索引誌、専門書目を作成して要求に応じられるように、まえもって用意すること、すなわち、レディー・レファレンスの可能な体制を図書館内部で整えること、もう一步進んでクイック・レファレンスが実施できるような準備をし、いつでもその要求に応じられる体制をつくること」⁽⁸⁾とされている。さらにこれに、(1)入手資料に対する伝達、(2)外国語文献資料の翻訳提供、(3)探索して収集した情報資料をまとめ、評価を加え、説明を加えて伝達、(4)館報あるいはニュース・レターなどの発行、などを内容とする能動的サービスが加えられている。⁽⁹⁾

ここには、サービスを第一義的機能とする近代図書館学の、現在における最高の到達段階である、受動的サービスから能動的サービスへというサービス概念の質的変化が現われてはいるが、ここに示された機能は大公共図書館の一主題分野の活動といかなる相違が見られるだろうか。「一般の公共図書館と異なり、特定の利用者だ

けに対して奉仕する」⁽¹⁰⁾ところにしか専門図書館を他の図書館から識別する基準は見出せない。

図書館は、まさに図書館という包括的名称のゆえに、そこに含まれる各種の図書館の特殊性を無視して、共通の機能を追求する中で得られた技術・理念を画一的に個別の図書館に適用することにのみ専心しすぎてきたのではないだろうか。この意味で、「これまでの専門図書館員に関する議論は、その力点が完全に『専門』ということばにではなく、『図書館員』ということばにおかれていた」⁽¹¹⁾というマッケンナの指摘は正しい。

II 専門図書館とその環境

前章では、専門図書館の活動を図書館一般と対比して検討する中で、現在、専門図書館は、他のタイプの図書館との同一性・共通性においてのみ理解され、何ら固有の役割を有するものとして理解されていないことを示した。本章では、専門図書館がその一部をなしている科学のコミュニケーションシステムの中における専門図書館の役割を考察する準備として、専門図書館とその環境について考え、さらに、現在、専門図書館が果たすべきであるとされている機能を再検討してみたいと思う。

1 科学におけるフォーマルなコミュニケーションシステムの成立

クロニックは、その著『科学技術雑誌の歴史』の中で、「もしこの研究がテーゼを持っているとしたら、それは、科学雑誌は科学のコミュニケーションの過程の中で、(1)新しい発見とアイデアの伝達のための運搬手段 (vehicle) として仕える、(2)知識の貯蔵手段 (repository) としての役を果たす、という二つの主要な役割を引受けてきた、ということである。」⁽¹²⁾と述べているが、このテーゼの正当性は多くの人々の認めるところである。⁽¹³⁾さらに、科学雑誌だけでなく、科学者の協同的活動の多くは、その目的をこの二つに求めることができる (III1 参照)。これは科学の性格から由来するものであるが、これについては後にふれるとして、ここでは現在のような科学雑誌を中心とする科学のコミュニケーションシステムはどのようにして成立したかについて簡単に述べておこう。

17世紀中葉まで、研究成果の迅速なコミュニケーションの唯一の手段は、私信の往復であった。しかし、私信の往復によっては、異なる分野間の交流はそれほど期待できなかったし、参加できる人数も限られていた。有効なコミュニケーションは、多くの場合、たとえばメルセ

ヌのような、個人の努力によるものであった。⁽¹⁴⁾ このようなコミュニケーションの限界は明らかである。すなわち、「それ (私的通信) は偶然、敵対的ライバル関係よりはむしろ友好的団体の創設、あるいは、しばしば地理的な近さに極めて大きく依存していた。」⁽¹⁵⁾

この溝を埋めるために多くの、非公式ではあるが、定期的な会合が持たれた。その一つに、ロンドン王立協会の前身とされている、ロンドンの科学者のグループがある。彼らはグレシャム・カレッジで会合を持っていたが、ポイルはこれを「インヴィジブル・カレッジ」とよんだ。(このグループは一度オックスフォードへ移った後、またロンドンに戻ってくる。) 1660年、王政復古の年に、この組織はロンドン王立協会 (Royal Society of London) と名のり、二年後に勅許状を与えられた。

王立協会の活動で最も重要であったのは週一回開かれた定例会、とくにそこにおける実験とそれに関する議論およびそれらの記録であり、規約の多くの部分はそれに関する規定にさかれている。⁽¹⁶⁾ 毎週行なわれたこれらの実験の記録は歴大な量になったが、その内容は、自分で行なった実験を除いて、会員以外には定例会の許可なく教えることを禁止されていた (規約第16章VI)。しかし、会員と非会員との間で行なわれていた研究に関する情報交換の際には、協会で実験され討議された科学上の問題について言及することが多くあったと思われるし、これらの記録のより広い流通を望む声は高まっていったと考えられる。

ところが、この時代に、研究成果を公けに発表する手段は単行書以外にはなかった。毎週行なわれた定例会での実験およびそれに関する議論を、一冊づつ図書の形で、出版していくことは明らかに困難であった。すなわち、王立協会は、その設立当初から、多数の論文を収録して定期的に刊行される「学術雑誌」を必要としていた。王政復古の後には、出版事情も良くなった。⁽¹⁷⁾ 1665年、王立協会から *Philosophical Transactions* が刊行されたが、これはオルデンバーグ個人の努力によって、また彼の責任において行なわれたものであり、協会の機関誌となるのは半世紀以上後のことである。同じ年、フランスでは *Journal des Sçavans* が刊行された。この二誌が学術雑誌のはじまりとされている。

しかしながら、この後ただちに、雑誌が科学におけるコミュニケーションの主要な手段となったわけではない。たしかに、形式においては、上記二誌およびその後に現われたすべての雑誌は現在見られるものと変わりはなかったが、⁽¹⁸⁾ その機能は他の手段によるコミュニケーションのための補助的道具であったようである：「王立

協会の *Philosophical Transactions* のような出版物はヨーロッパ全域の学者の著書と研究活動をダイジェストするという定められた機能を持っていた。これらをたまたま読んだ読者は、それ以前には欠かすことのできなかった、個人的な通信のネットワークとか、個人についてのうわさとか、ヨーロッパの書店を歩き回るといったことなしに、いろいろな知識を手に入れることができた。しかし最初は、これらの雑誌は、書物を読んだり書いたりするという学者の義務を少しも軽減しなかった。その本来の目物は、新しい知識を発表するという学者的なものよりはむしろ、何が誰によってなされているかを見つけ出すという社会的なものであった。⁽¹⁹⁾ すなわち、初期の科学雑誌はレビューとクリヤリングハウスの機能に重点がおかれていた。⁽²⁰⁾ 科学論文が現在のような内容・構成をとるようになるにはこれから約二百年持たなければならない。⁽²¹⁾ この間に、さまざまな形態の科学雑誌が、二つの主要な役割のいずれかに重点をおきながら、現われた。⁽²²⁾

このようにして成立し、現在では科学のコミュニケーションの中で必要不可欠と考えられている科学雑誌による論文発表のシステムも以前から多くの強力な批判にさらされており、これに代わるべきシステムについての様な提案は 50 年以上も前からあった。もし図書館の側で、新しいメディアが現われたら「図書館資料」の細目をつつふやせばそれで事足りるとするような安易な対応策しかとらないとしたら、科学のコミュニケーションシステムの根本的な改変が行なわれたとき、専門図書館はどうなるのであろうか。

2 専門図書館とその環境

学会の設立、科学雑誌の発行に見られる科学者の協同的研究への動きを見ながら、近代に至るまでの図書館員はいかなる活動を行なっていたであろうか。シュアは「……図書館は学問の世界における協力を求めて起こったこれらの運動を共有もせず、よそで何が行なわれているかについて明らかに何の関心ももたず、そしてそれについての知識さえほとんどもたずに、各機関はそれ自身の個人的方向を静かに求めていた。」⁽²³⁾ と述べて、近代公共図書館の発生までの時代を「図書館個人主義の時代」(the age of library individualism) と呼んだ。彼は、この時代の利用者・図書・コレクションの性格と組織および図書館間の関係などの特徴を記すなかで、サービスは画一的で、図書館に必要とされたのは形象的記録 (graphic records) の倉庫以外の何ものでもなく、図書館員に必要とされたのはそれらの番人の域をほとん

ど出なかった、と述べている。⁽²⁴⁾

このような図書館個人主義の時代は、19世紀中葉の近代的公共図書館の誕生によって、終わりをつげたように見える。そして現在、文献量の急激な増加とその質の変化によって、また図書館とその利用者との関係の変化によって、図書館は決して個人主義の時代に戻ることはないように見える。すなわち、すべての研究資料を自己あるいは庇護者の負担で購入することのできない、大量の「職業的学者」が出現した。⁽²⁵⁾ 「伝統的な教科書依存により制限されていた (学生) 読書範囲」⁽²⁶⁾ は高等教育における教育方法の変化によって一挙に拡大した。学者は自分と専門を同じくする人々の名前および自分の専門分野に関する資料をすべて記憶していることは不可能になった。学問の分化と統合により、それまでまったくなじみのなかった分野の知識が必要になることもあった。これまで図書館資料の中心であった図書は必ずしも最も重要な資料ではなくなった：図書館に新しく入ってきた、雑誌、モノグラフ、テクニカル・レポート、地図、パンフレット、新聞、複製絵画、レコード、マイクロフォーム、テープ、等々、は図書と同じ程度に、場合によってはそれ以上に、重要な資料となった。レファレンスサービスが行なわれるようになり、他の業務に比してその重要性がますます高まりつつある。多くは計算機を利用した、いっそう洗練された多様なサービスが図書館により、あるいは図書館を通して、提供されるようになった。そして、多くの地域的、全国的、国際的な相互協力ネットワークがつくられあるいは計画されている。

ところで、大量の文献の処理、なかんづくその内容の分析・蓄積・検索の仕事にとりくんだのは、図書館学の訓練を受けていない、他分野 (とくに自然科学系) から入ってきたドキュメンタリストたちであった。ここで、このような大量の文献の処理には機械が必要であり、図書館員は機械に弱いからこのような仕事には向かなかったのだと一般には言われている。しかし、たしかにドキュメンタリストたちは機械を利用したが、当時の機械はそれほど複雑ではなかったし、科学技術の分野あるいはその後事務分野において、電子計算機が一般に使れるようになるのはずっと後のことである。ドキュメンタリストの登場を促した最大の原因は、図書館員が、雑誌の重要性の増大にも拘わらず、図書にしがみついていたことである。⁽²⁷⁾ すなわち、研究方法の変化に対応できなかったことである。

第二次大戦後、文献の量と質の変化と同時に、新しい学問分野が続々と生まれた。地域研究、材料科学、さらに最近の情報科学などの新しい分野の出現によって、こ

れまで、物理学、生物学、化学といった（一見したところ扱かう対象による分類のようであるが、これらの歴史的発展を見れば明らかなように）本質的にはそこで用いられる方法によっていた科学の分類をそのまま受けついで図書館分類法は、図書の分類さえ困難にしている。分類表の改訂は学問の進歩から余りにも遅れており、この遅れは分類表の展開や一部の手なおしによってとり戻せるものではない。境界領域として知られている、新しく出現した学問分野は、いずれも、方法中心の分類の枠内に入るものではなく、対象を中心として再構成されたものなのである。

新しい学問領域の発生と並んで、学問研究の組織の変化が挙げられる。今世紀に入ってから、科学技術の分野においては、グループワークによって大きな成果があげられる場合がますます多くなった。また、近年の宇宙科学、原子力科学、海洋科学等のいわゆる巨大科学では、以前は戦時の軍事研究においてしか考えられなかった、国家による科学の組織化が進められている。科学技術の進歩が少数の天才に依存していた時代には、個人に対するサービスもそれなりの有効性を保てたかもしれない。しかし、現在もこれと変わらぬ個人を対象とした活動を続けていてよいのであろうか。

現代図書館に対する、このような批判をさらに続けていくことはそれ程困難なことではないだろう。しかし、いかに批判しても、現代図書館学が描く図書館像は、「図書館個人主義の時代」の図書館とはまったく異なるものである。図書館の第一義的機能は「保管」から「サービス」に変わった。このような機能の移り変わり、現象としての明らかな図書館の隆盛、およびいくつかの国における図書館員の専門職としてのある程度の地位の確立は、図書館に関する理論の発展という強固な基盤の上に築かれたものであるかのごとき印象を与えている。しかし、図書館理論の発展は実利主義の方向をとり、専門図書館はこれをそのままの形でとり入れた。「利用者へのサービス」はその中心にある。

3 サービス機能の検討

文化の発展につれて社会的分業が進み、社会は新たな制度⁽²⁸⁾を作り出していく。この新しい制度は、具体的には、国家・地方行政機関の必要あるいは民衆の要求などによって設立される。しかし、ある制度の発生を促がす力とその制度を維持していく力は同じであるとは限らない。制度は人的組織・規範・物的装置を持ち、これらによってその目的とする諸活動を行なうが、⁽²⁹⁾ このことは、制度はそれ自身社会的要求とは別の自己保存性を

持つことを意味している。すなわち、制度を維持する力と考えられるのは、社会的要求と制度の自己保存性である。制度の自己保存性はその制度を機能させる人々（personnel）によって最も強く支えられる。しかし、制度を維持する力によって可能なのはその制度の現状維持だけであり、制度の有効性の増大なかんづく職員の地位向上の欲求は満たされない。これを可能にするのは社会制度に対する需要の増大以外にない。

これより、社会制度に対する需要には、内因的需要と外因的需要の二つがあると考えられる。内因的需要とは社会が発展していくために不可欠であるとして社会が必要とするもの、すなわち内因的必要性に基づく需要であり、外因的需要とは制度という外在的な力によって触発される、すなわち外因的誘因による需要である。⁽³⁰⁾ 内因的需要の強い制度としては社会成員の生存そのものに関わる病院などがあろうし、外因的需要喚起の例としては完全競争下にある必らずしも必需品とは言えぬ商品の供給者たちのさまざまな宣伝活動がある。内因的需要の大きな制度の機能の独占は利益獲得の捷徑であると考えられる。これら二つの需要は相互的であり、判然と区別しがたいものではあるが、いずれを重視するかによって制度の活動は大きな違いを見せる。ライブラリアンシップにおける哲学の欠如とは、まさしく、内因的需要についての研究が理論と言えらる程度にまで高められていないことを言っている。図書館は、内因的需要に関する考察の理論的展開を目ざすことよりも、外因的需要の昂揚という実利主義の方向をとったのである。

すなわち、図書館員がみずからの地位を高めるためには目に見える指標を設定する必要が生じ、図書館は、その種類を問わず、一様に、その有効性を他に示す指標として貸出冊数あるいは登録者数を採用してきた。利用者の要求に応えるサービスというのは利用度数を増すために考え出された図書館の機能である。このことは、現代図書館の花形であるレファレンスワークに関する書物に、利用者のご機嫌を損ねないための、道徳的訓話が多く見られることによっていっそうはっきりするのではないだろうか。図書館がこの機能以外にシステムの評価基準を持たなかったことは大きな不幸と言わねばならない。（なお、Ⅲ2 参照）

4 コミュニケーション的図書館学の検討

我々は、前節で、「サービス機能」という言葉を使ったが、これは一般に使われている「図書館のサービス機能」というような用語法を借用したにすぎない。前節ではこれは、現代図書館はその活動の中心を「利用者への

サービス」におくべきである、という至上命令を指す言葉として用いたのであるが、上の言葉が明確なイメージを与えてくれないのは、「サービス」は、その機関があらゆる種類の業務を扱かうのではない以上、活動の精神的な指針とはなりえても、機能にはなりえないことによる。この意味で、現在認められている図書館の機能は、記録された情報の時間的・空間的制約を越えたコミュニケーションである、と言ってよいであろう。我々は、図書館学の論稿においても、シャノンのコミュニケーションのシエマ、あるいはその変形、を多く見かける。

しかし、図書館学の理論を築く場合、その基となる機能の説明可能性ばかりでなく、その限界をも十分に認識しておかなければならない。クリストは、現代図書館の承認された機能はコミュニケーションであり、コンピュータ化による情報検索はこのような見方の最も進んだ形態であるとして、この機能に基づいては図書館の基礎理論・哲学をうちたてることができないと述べている。⁽³¹⁾ 彼は、「コミュニケーション理論によって図書館の基本的諸機能（収書・保存・分類・レファレンス）に求めうる機能的要求の限界」を次のようにまとめ、コミュニケーション的図書館学を批判している。⁽³²⁾

収書：収書方針は断片的。孤立した個別的な要求に直接関係しており、概念化された集合的な社会から生じたいかなるものでもない。考えられているニーズは個人的であり、集合的な意味における「文化的」なものでも「社会的」なものでもない。コレクションで第一に強調されるのは：

カレントな資料（要求されるもの）
事実資料（データ／記述的）
ポピュラーな資料

保存：保存の基礎は資料が要求されるかもしれない、それゆえコミュニケーションされる必要がおこるかもしれないという可能性にある。ある資料は歴史的にあるいは教育的に重要であるかどうかという考え方は図書館にとって無関係なものとなる。これは利用者によって決まる。保存方針は本質的に短期的である。すなわち、要求される限りでしか価値がない。

分類：基本的機能は情報検索である。必要とされる組織化の方式は「配架」システム以上のものである必要はない。諸資料を統合する、あるいは相互に関連づける必要はおこらない。開架か閉架かは学習理論に関連のある問題というよりはむしろ純粋に管理上の問題である。

レファレンス：資料の利用は質問に関連している。すなわち人的要素は重要でない。「質問はこれだけですか？」とか「回答は何に利用なさるのですか？」といった質問は関連がない。

図書館員にとって尋ねられた質問以上に出る必要はない。レファレンス事項は本質的に短命である。相互作用はまったく表面的である。

レファレンスサービスの考え方は単なる「反応」(reaction) である。

彼の目標は、主として教育機関に付設されている図書

館の、基礎理論・哲学を築くことであり、その提案する教育図書館学 (educational, or academic, librarianship) の概念は、本質的には、ライブラリーカレッジ運動の理論と哲学の模索と考えられる。しかし彼の、教育活動そのものに根ざした図書館活動である教育図書館学の提言は、専門図書館の役割を考える参考となる。

彼の立論の根拠は、教育はコミュニケーションを包摂するものであり、教育機関の中で、図書館は教育事業に依拠してはじめてその理論的範囲の全領域をカバーできるという主張である。このような主張は、大学図書館あるいは学校図書館を念頭において考えるとき、まさしく妥当なものと考えられる。図書館の活動は、何のためにその活動を行なうかが理解されない限り、静的になってしまうからである。

ところが、クリストはこのような議論を他のタイプの図書館にまで敷衍せず、それらについてはむしろ伝統的な立場をとっている。彼は言う：「しかしながら、すべてのタイプの図書館が図書館の教育機能の理論的範囲の全域をつくしているわけではない。例えば、技術図書館においては、図書館の機能がダイレクトアクセスのコミュニケーションあるいは情報の検索・提供のレベルを越えることはめったにない。技術図書館においては、図書館のコミュニケーション、情報検索機能が最優先する。」⁽³³⁾あるいは、「専門図書館あるいは技術図書館は、最も容易に、コミュニケーションが図書館の第一義的機能であり、管理手順およびサービスが効果的なコミュニケーションあるいは検索を提供するように開発されているようなタイプとして見ることができる。」⁽³⁴⁾ 専門図書館においてもその活動が依拠すべき事業があると考えられる故、これには同意できない。

III 専門図書館の役割を求めて

古い制度・機関が新しい変化に対応できなくなった時、社会は別の制度・機関を創り出してこの変化に応える。図書館人が、ドキュメンテーションと図書館学、あるいは情報センターと図書館について、いかにその目的の同一性を強調して、ドキュメンテーション・情報センターを図書館学・図書館の概念の枠内に押しこもうと努力しても、やはり、前者の発生を促した環境の変化に図書館側は、その時点では、対応できなかったという事実は認めなければならない。そして、その事実を認めつつも、これらの発展をとり入れて、第一章で述べた図書館の諸類型の中に見られる画一性に対して、我々は専門図書館の役割を考えて行かなければならない。

1 研究開発における情報活動の意義

現在、専門図書館として理解されている図書館の一形態を識別している基準は、所属機関の類型であることはすでに述べた。しかし、この所属機関の活動を見ると、調査・研究活動が際立った特徴としてうかんでくる。そして、専門図書館の役割・特殊性を考える出発点として、この特徴ほど適当なものはないと思われる。これらの機関で行なわれている調査・研究・開発は科学的研究方法に基づいて行なわれ、情報活動の必要性は科学のもつ性格から由来している。

科学研究とは、それまでに蓄えられてきた膨大な知識を批判的に継承あるいは破壊し、新たな知識を付加していく作業であり、科学者は過去になされた、あるいは現在なされつつある研究成果を検討し、みずから新しい成果を作り出すことを仕事としている。革命的な理論も、過去に提出された理論と実験の蓄積がなければ生まれてこない。すなわち、科学研究には、それまでの研究成果の蓄積を利用することが不可欠の条件となる。パナールはこれを科学の「累積的伝承性」とよんでこう述べている：「科学者の使ういろいろな方法は、もし科学者がそれまでに蓄えられてきた莫大な知識と経験を自由に使うことができなかつたら、ほとんど役に立たないであろう。それらの知識や経験はどの一つもおそらく完全に正しくはないが、現役の科学者が将来の仕事へ進むための出発点とするには十分な正しさをもつ。」⁽³⁶⁾

さらに、科学研究は、過去の蓄積ばかりでなく、同時代人の成果にも依存している。ある成果が、過去の研究の助けのみにより、全面的に一個人の努力によって達成されることは極めて稀である。科学研究は、一步一步の進歩がお互いに依存しあっている、競争的かつ協同的の事業でもある。これを科学の「協同性」と名づけておく。

科学のもつこのような累積的伝承性と協同性は、科学研究の基本的前提として、研究成果の時間的・空間的伝達を要請する。それゆえ科学においてコミュニケーションは不可欠の活動となる。科学者の協同的活動の多く（例えば、私信の往復、学会の設立、研究会・分科会の組織、雑誌の刊行、学会大会の開催、抄録誌の発行）は、既存の組織・活動で満たされなかった、研究成果の円滑なコミュニケーションと蓄積された研究成果の効率的な利用に対する要求から生まれてきた。そして、広範囲性・確実性・完全性といった特長を持つがゆえに、現在最も重要とされているのは科学雑誌である。

このような形で蓄えられた科学知識の記録も、産業革命およびそれ以前において見られたような少数の卓越し

た技術者の発明の才に技術の発展が依存していた時代には、それらの体系的な保存の方法と組織化をはかる必要はそれ程なかったと思われる。しかし、企業の規模がますます大きくなり、技術がますます高度になるにつれて、研究にも組織化の必要が生まれてくる。そして、研究開発における図書館の重要性も増してくるのである。

マーシャルは、英国における製造会社に付設された図書館の歴史的発展を記す中で、これらの図書館の発生の直接の原因を研究開発の重要性を経営者が認識したことに帰している。⁽³⁶⁾ すなわち、英国は、1851年のロンドン万国博覧会当時は技術的には明らかに世界の最優位に立っていたのに、1867年のパリ万国博ではヨーロッパのいくつかの国におくれをとってしまったことが明らかになった。このため先見の明ある二、三の企業は研究部門を設置し、最初はその主任の部屋に置かれたわずかの図書や雑誌から、製造会社の図書館が生まれていったのである。

研究開発活動における情報活動の必要性あるいは重要性は誰もが強調している。⁽³⁷⁾ しかし、研究棟の中での資料室の場所に関する検討、資料の組織化と提供の技術などを越えた、研究部門の有機的な一部分としての図書館の地位と役割についての考察はほとんど進められていない。もちろんこれは、一つには、その前に考えるべき研究開発の進め方あるいは管理は、単純作業の計画・管理にはない、困難な問題を持っていることによるのだが、近年、研究開発の計画や管理について大きな注意が払われるようになったことは注目してよい。⁽³⁸⁾ これらは「科学の科学」(science of science)あるいは「研究に関する研究」(research on research)とよばれる新しい学問領域の一分野である「科学政策」(science policy)⁽³⁹⁾という主題の中で扱われている。

現在その研究は、科学発展あるいは研究の数量的特徴の抽出以上には出ておらず、その主眼も国家的見地からの科学の組織化と政策におかれている。しかし、一研究組織内における研究開発の計画や管理に関する理論は、このようなマクロな立場からの理論の進歩に支えられて、ますます豊かになっていくものと思われる。それと同時に、現在はまだ切り離されて論じられている情報活動も、研究活動の有機的な一部としてくみこんで、論じられるようになるであろう。その中で専門図書館の役割も次第に明らかにされていくと思われるが、ここではその際に注意すべき一、二の点をあげて本論を終ろう。

2 専門図書館の役割

フォセットは、多年にわたる専門図書館活動の経験

とドキュメンテーションの研究を踏まえて、専門図書館を次のように定義した：「専門図書館とは、そのメンバーたちが少なくともその諸活動のいくつかを共通の目的に向けている、図書館外に存在するあるグループにサービスしている図書館をいう。」⁽⁴⁰⁾この定義は D. V. アーノルドの定義を、「少なくともその諸活動のいくつかを共通の目的に向けている」という限定句を彼の定義に加えて、修正したものである。フォセットは、この限定句によって、アーノルドが専門図書館に含まれると考えていた大学図書館を除外している。⁽⁴¹⁾

この定義は、「共通の目的」に関する考察が充分になされているなら、充分満足のいく定義である。また、専門図書館が利用者に対するサービスを第一義的機能としているなら、これで充分である。しかし、専門図書館は、その情報活動の基礎を親機関の研究開発活動におかない限り、有効な活動はできない。これまで専門図書館はその活動の基礎を、共通の目的そのものではなく、他の図書館がサービスの成果の唯一の尺度としていた利用者数・貸出冊数などの向上において、利用者統計に一喜一憂する傾向が見られないではなかった。専門図書館では貸出冊数を増やしても何の意味もない。状況判断に基づく多少の戦略を否定するわけではないが、図書館の有効性は本来、量によってではなく、質によって定められるべきである。

これまで述べてきたように、専門図書館はその所属する機関の活動によって、他と異なる際立った特徴を持っている。その特徴とは、調査・研究・開発⁽⁴²⁾の中で、これらに不可欠な情報活動を担当することである。専門図書館はその活動の基礎を所属機関の活動の中におかねばならない。専門図書館員は調査研究活動の中における情報の役割を考えるべきであり、図書館を所属機関の調査研究活動の中においてその役割を考えるべきである。そして、専門図書館の有効性は所属機関で行なわれる調査研究活動への貢献度によって測られるべきである。もちろんこの貢献度の測定はそれ自身数量化を困難にする要素が多いであろうが、だからといって、それが安易な指標をとることの理由づけにはならない。これまでの図書館活動は利用者の来館から始まった。これまでの活動は利用者から出された要求に応えることが大部分であり、科学者・技術者の研究活動・研究方法にまで立入ることは越権であると考えられていた。

ここで所属機関の活動そのものに深く根ざした情報活動は利用者研究 (user study) によって可能になるとの批判がでるかもしれない。しかし、利用者研究に対しては、「図書館のポリシーは人々が実際に図書館から必要

としているものに基づかなければならない」と述べてサービスを図書館の第一義的機能としている側からも、次のような有力な批判が出されていることに注意しなければならない。「それら(利用研究 (use-study) の諸方法)は現在何が起きているかをいくらかの正確さをもって述べ、学者たち……が必要であると信じているものについての彼ら自身の評価を分析することはできるであろう。しかし、学者たちのこの確信は主観的な判断にすぎず、現在の状況あるいは可能な発展についての全体的な知識なしに行なわれるものであろう。」⁽⁴³⁾我々はこれに、利用者研究は所属機関の活動の間接的な把握の手段でしかない、ということをつけ加えておこう。

利用者研究の目的ははっきりしている。それは次の文章に明快に表現されている：「……今日のように社会が複雑になり、様々な情報流通チャンネルがあり、利用者層も多様化してくると、どういう人が、いかなる時に、いかなる情報を求めているか、図書館に対しどのような要求をもっているかは基だつかみにくくなっている。そこでこれらをつかむべく、しかるべき調査研究を行なって、……、システムにフィードバックさせて、利用者の要求によりマッチしたいいわゆる user oriented なシステム運営をはかろうとする動きが強くなってきているのである。」⁽⁴⁴⁾ コミュニケーション的図書館論では、図書館員は記録資料(あるいは情報)の媒介者にすぎない以上、利用者との間に溝ができるのは当然であり、その溝を埋める方策を探る方向に進むこともまた当然である。サービス志向の果実であるレファレンス/情報サービスの発生と現在見られる利用者研究の流行はこの流れの当然の帰結であった。

む す び

専門図書館について考える場合、我々は第一歩から障害にぶつかる。それは第一に、専門図書館の上位概念とされている図書館の役割が明確に認識されていないことによる。これは図書館学あるいはライブラリアンシップの基礎理論・哲学の欠如となって現われている。第二に、それは図書館の諸タイプの画一的理解によっている。このため専門図書館は他の図書館と同列に並べて論じられ、業務の共通性のみが強調されることになる。専門図書館の「専門」は軽視され、「図書館」だけに力点がおかれる。第三に、それは研究開発活動の中における情報活動の意義と役割に関する考察が不十分なことによる。このことによって研究活動と情報活動との間に懸隔が生ずる。

これらのすべてが専門図書館の役割についての理解を妨げ、専門図書館を一つの自己完結的な閉じたシステムとし、専門図書館を図書館員をインターフェイスとする一つの Q & A システムとしてしまっている。

この現実を招来した最大の原因はやはり、専門図書館が「サービス」を第一義的機能としてしまったことにあり、筆者は考えている。図書館員の専門職としての地位が低い時期にはサービス機能を重視するのやむを得ないかもしれないが、これは何ら社会制度の必然性から生まれたものではないこと、それゆえいつまでもこれに依拠するのは誤りであると考え。

本論は、研究活動における情報活動の意義に関する考察の第一歩にすぎない。これらの多くは将来の課題として残されているが、考察の手がかりは与えた。研究方法・研究管理・研究組織などについての研究の成果は有用な緒となるであろう。これはその途中で研究活動の諸段階の境界を現在よりもあいまいなものにしてしまうかもしれない。しかし、それはより効率的な研究開発活動を行なうために必要な混乱である。そして、これが明らかにされれば、専門図書館の定義それ自体はそれほど重要なものではなくなる。

註

- (1) Foskett, D. J. (1972) "Special Libraries", Paper prepared for presentation at the International Conference on Librarianship held in Kingston, Jamaica, 1972 April 23-29. ERIC Microfiche ED 061 995. 16 p. p. 1.
- (2) Strable, Edward G., ed. (1966) *Special Libraries: A Guide for Management*. New York: Special Libraries Association. 63 p. pp. 1-2.
- (3) Foskett, D. J. (1955) "Special Libraries" in his *Science, Humanism and Libraries*. London: Crosby Lockwood, 1964. pp. 34-44.
- (4) Strable, *op. cit.*, p. 3.
- (5) 武田虎之助 (1960) "図書館総論" p. 17. 日本図書館協会 (編)『図書館ハンドブック増訂版』, 日本図書館協会, 1960. pp. 17-27.
- (6) *Ibid.*, p. 21.
- (7) *Ibid.*, pp. 21-23.
- (8) 河野徳吉ほか (編),『専門図書館のための資料の整理と運用』, 日本図書館協会, 1967. pp. 17-18.
- (9) *Ibid.*, pp. 346-347.
- (10) *Ibid.*, p. 19.
- (11) McKenna, F. E. (1972) "Training for Special Librarianship." Paper prepared for presentation at the Lectures on Special Librarianship held at Tokyo University, 1972 Oct. 31-Nov. 2.
- (12) Kronick, David A. (1962) *A History of Scientific and Technical Periodicals: The Origin and Development of the Scientific and Technical Press, 1665-1790*. New York: Scarecrow Press. 233 p. p. 8.
- (13) たとえば、次の論文に、1964年に米国国立科学財団が、米国の代表的な学術雑誌 262 誌について調査を行ない、その

結果を分析して、学術雑誌にはこれと同じ二つの基本的機能が与えられていることが見出されたことが紹介されている。

竹内 寿 (1972) "一次情報(その1)" (専門図書館運営法入門講座③), *ドキュメンテーション研究* 22 (10) 339/346. p. 339.

- (14) Bernal, J. D. (1965) *Science in History, 3rd edn.* 鎮目恭夫訳『歴史における科学』みすず書房, 1966. p. 267.
- (15) Shera, Jesse H. (1953) "Emergence of a New Institutional Structure for the Dissemination of Specialized Information", p. 37. in his *Libraries and the Organization of Knowledge*. London: Crosby Lockwood, 1965. pp. 34-50.
- (16) "Statutes of the Royal Society, Enacted in 1663". rep. in Weld, Charles R., *A History of the Royal Society*. London: John W. Parker, 1848. vol. 2, pp. 524-540. Appendix V.
- (17) Johnson, Elmer D. (1966) *Communication, 3rd edn.* New York: Scarecrow Press. p. 111.
- (18) というよりはむしろ、オーンステインの言葉を借りれば、「これに続くすべての科学雑誌はこれら二つのイミテーションとして発展した。すなわち、*Journal des Sçavans* はより広い読書大衆にアピールしなければならない雑誌のお手本として利用され、毎月発行される大部の *Philosophical Transactions* は科学の学会の出版物の標準となった。」Ornstein, Martha, *The Role of Scientific Societies in the Seventeenth Century, 3rd edn.* Chicago: University of Chicago Press. 1938. p. 202.
- (19) Price, Derek J. de Solla (1963) *Little Science, Big Science*. New York: Columbia University Press. 1963. p. 63. 島尾永康訳『リトル・サイエンス、ビッグ・サイエンス』創元社, 1970.
- (20) cf. Ziman, John M. (1968) *Public Knowledge: An Essay concerning the Social Dimension of Science*, Cambridge: Cambridge University Press. 1968. p. 105.
- (21) Price, *op. cit.*, p. 64.
- (22) Kronick, *op. cit.*
- (23) Shera, *op. cit.*, p. 36.
- (24) *Ibid.*, pp. 37-39.
- (25) Rothstein, S. (1955) *The Development of Reference Services through Academic Traditions, Public Library Practice and Special Librarianship* (ACRL Monographs, No. 14). Chicago: Association of College and Reference Libraries. chap. I.
- (26) *Ibid.*, p. 21.
- (27) Shera, Jesse H. and Margaret E. Egan (1953) "A Review of the Present State of Librarianship and Documentation", in Bradford, S. C., *Documentation, 2nd edn.* London: Crosby Lockwood. 1953. pp. 11-45. also, in Shera, *Documentation and the Organization of Knowledge*. Connecticut: Archon Books. 1966. pp. 21-53.
- (28) ここで制度は、マリノフスキーと同様に、人間が何らかの目的を達成するために作る組織の単位、として理解しておく、さしあたり、図書館は社会制度 (social institution) か社会機関 (social agency) かという議論には立入らない。制度と機関の差違についてはシェラの次の著書を参照のこと。Shera, Jesse H. (1949) *Foundations of the Public Library: The Origin of the Public Library Movement in New England, 1629-1855*. Chicago: University of Chicago Press. 1949. p. v.
- (29) Malinowski, B. (1944) *A Scientific Theory of Culture*. 姫岡, 上子訳『文化の科学的理論』岩波書店. 1958.

第6章。

- (30) 社会制度はそれ自身社会内の存在であるから、内と外という二分法は不適當であるとの批判を受けるかもしれない。しかし、ある制度が、社会的存在理由の探究を止め、閉じたシステムになった時、その制度はまさしく社会外的存在と等しい存在になってしまう。その意味で、これはそのような極端な状況に対して与えた用語を拡張して用いたものと理解されたい。
- (31) Christ, John M. (1972) *Toward a Philosophy of Educational Librarianship*. Littleton: Libraries Unlimited. chap. 7.
- (32) *Ibid.*, p. 76.
- (33) *Ibid.*, pp. 75-78.
- (34) *Ibid.*, p. 83.
- (35) Bernal, *op. cit.*, p. 16.
- (36) Marshall, Margaret R. (1972) "British Industrial Libraries before 1939". *Journal of Documentation* 28 (2)107/121.
- (37) 例えば、百瀬好若(1971)『技術開発論』(平井泰太郎編, 経営学モノグラフ11) 評論社. 1971. pp. 159-161.
- (38) 例えば、山田圭一(1972)『現代技術と社会』(潮新書 89) 潮出版社. 1972.
- (39) De Reuck, A., Maurice Goldsmith and Julie Knight (eds.) *Decision Making in National Science Policy: A Ciba Foundation and Science of Science Foundation Symposium*. London: J. & A. Churchill. 1968.
- (40) Foskett. *Science, Humanism and Libraries*. p. 34.
- (41) *Ibid.*
なお彼は、20年近く経った今日も、この定義を変えていない。see, his "Special Libraries" (ERIC Microfiche ED 061 995)
- (42) その情報活動についてみる限り、調査、研究、開発の間には本質的な違いはない、と私は考えている。
- (43) Mackenzie, A. Graham (1970) "Systems Analysis of a University Library" p. 36. in Foskett, D. J., A. de Reuck and H. Coblans (eds.) *Library Systems and Information Services: Proceedings of the Second Anglo-Czech Conference of Information Specialists*. London: Crosby Lockwood. 1970. pp. 35-43.
- (44) 佐藤隆司(1972) "利用者研究" (専門図書館運営法入門講座②) p. 275. *ドクメンテーション研究* 22(8) 275/283.